Raspbianのいづれかのバージョンからntpはサポートされなくなった。

ntpクライアントにsystemd-timesyncdが使われているのでntpクライアントやntpdate) と競合する。

インターネットに接続(ポートNo123が伝わる)ではそのままディフォルトでインター ネット上のサーバと同期がとられるが、当施設のプロキシ環境では以下の状態となる。 なお、以下の内容は同期がとれない場合の対処であって、同期時間が図れる環境 はスルーしてよい。(備忘録的情報)

\$ sudo timedate status

pi@raspberrypi:~\$ timedatectl status
Local time: 月 2019-04-08 20:48:13 JST
Universal time: 月 2019-04-08 11:48:13 UTC
RTC time: n/a
Time zone: Asia/Tokyo (JST, +0900)
Network time on: yes
NTP synchronized: no
RTC in local TZ: no
pi@raspberrypi:~\$

ネット情報によれば、/etc/systemd/timesyncd.conf を編集する。 バックアップをとって編集する。

\$ sudo cp timesyncd.conf timesync.conf.org

pi@raspberrypi:~ \$ cd /etc/systemd/
pi@raspberrypi:/etc/systemd \$ sudo cp timesyncd.conf timesyncd.conf.org

\$ sudo nano timedyncd.conf

pi@raspberrypi:/etc/systemd \$ sudo nano timesyncd.conf

以下のコメントをはずし、

NTP= 以降にntpサーバを登録する。ここでは172.16.0.1(LAN内のタイムサーバ)を 登録する。

[Time] NTP=172.16.0.1 #FallbackNTP=0.debian.pool.ntp.org 1.d

systemd-timesyncdを再起動する。

pi@raspberrypi:/etc/systemd \$ sudo systemctl restart systemd-timesyncd

同期履歴を調べる

\$ systemctl status systemd-timesyncd(.service)

pi@raspberrypi:/etc/systemd \$ sudo systemct| status systemd-timesyncd.service

同期できない場合、systemd.serviceの応用サンプルとしてntpdateを使用する方法も示す。ntpdateをインストールする。(timedatectlは停止させ、競合を避けること)

pi@raspberrypi:~ \$ sudo apt-get install -y ntpdate

実行するスクリプトファイル(スクリプトファイルにするには理由がある。後述)を作成 する。ここではcheckdate.shのファイルとする。ここでは/home/pi上に作成している。

pi@raspberrypi:~ \$ nano checkdate.sh

ntpdateは/usr/sbinにインストールされており、300秒(5分)おきに同期をとる設定とする。ntpサーバは172.16.0.7とする。

GNU nano 2.7.4	ファイル:	checkdate.sh
41 /bin/ob		
#! /DIN/SN		
while true		
do		
sudo /usr/sbin/ntpdate	172.16.0.7	
sleep 300		
done		

checkdate.shのパーミションを変更する。

ファイル(F) 編集(E) タブ(T) ヘルプ(H) **pi@raspberrypi:~ \$** chmod 755 checkdate.sh

続いて、systemdのサービスファイルを作成する。

ここでは/etc/systemd/systemに get_date.serviceの名前で作成する。

```
pi@raspberrypi:~ $ cd /etc/systemd/system/
pi@raspberrypi:/etc/systemd/system $ sudo nano get_date.service
```

ファイル: get_date.service

[Unit] Description = Get_date Auto Start

[Service] Type=simple ExecStart=/home/pi/checkdate.sh

[Install] WantedBy=multi-user.target

GNU nano 2.7.4

スクリプトファイルのcheckdate.sh をフルパスで指定。

get_dateをスタートさせる。

\$ sudo systemctl enable get_date(.service)

\$ sudo systemctl start get_date(.service)

pi@raspberrypi:/etc/systemd/system \$ sudo systemctl enable get_date
pi@raspberrypi:/etc/systemd/system \$ sudo systemctl start get_date

しばらくすると同期に成功する。

再起動後の自動立ち上がり後をチェックする。
\$ sudo systemctl status get_date (.service)
最初の1回目はntpサーバーが探せず、同期処理に失敗している。

.]: Started Get_date Auto Start. root : TTY=unknown ; PWD=/ ; USER=root ; COMMAND=/usr/sbin/ntpdate 172.16.0.7 pam_unix(sudo:session): session opened for user root by (uid=0) s.sh[288]: 31 Aug 15:14:48 ntpdate[341]: no servers can be used, exiting pam_unix(sudo:session): session closed for user root root : TTY=unknown ; PWD=/ ; USER=root ; COMMAND=/usr/sbin/ntpdate 172.16.0.7 pam_unix(sudo:session): session opened for user root by (uid=0) s.sh[288]: 31 Aug 15:20:19 ntpdate[891]: step time server 172.16.0.7 offset 24.275308

ループプログラムのおかげで

5分毎にntpdateの実行で同期が図られている。

スクリプトファイルにするのは最初の1回目のntpdateの同期処理は失敗しているので定期的な継続処理が必要となるため。

スクリプトファイルは簡単なプログラムが作成できるメリットがある。

LAN内に適当なntpサーバがない場合、LAN内の開発支援PCであるubuntuPCをntp サーバになってもらうことが可能。

ubuntuPCにntpをインストールする。

user01@ubuntu:~\$ sudo apt-get install -y ntp

/etc/ntp.confを編集する。

user01@ubuntu:~\$ cd /etc
user01@ubuntu:/etc\$ sudo cp ntp.conf ntp.conf.org

自マシンのハードウエア時間をもとにしたタイムサーバとするにはntp.confの文末に 以下の2行を書き加えればよい。

stratum は stratum 10 にて設定を記述する。

IPアドレス 127.127.1.0 とは特別な番号アドレスである。

#broadcastclient
server 127.127.1.0
fudge 127.127.1.0 stratum 10

ntpを再起動させる。

\$sudo /etc/init.d/ntp restart

あるいは

\$sudo service ntp restart

\$ sudo systemctl restart ntp

user01@ubuntu:~\$ sudo /etc/init.d/ntp restart
[ok] Restarting ntp (via systemctl): ntp.service.
user01@ubuntu:~\$

\$ntpq -p にてサーバを検索する。

5分から10分経過後、LOCA(0)に*が付く。"st"欄 stratumが5で認識されている。

user01@ubuntu:~\$	ntpq -p						
remote	refid	st	t	when	poll	reach	del
0.ubuntu.pool.n	.POOL.	16	Ρ	-	64	0	0.0
1.ubuntu.pool.n	.POOL.	16	р	-	64	0	0.0
2.ubuntu.pool.n	.POOL.	16	р	-	64	0	0.0
3.ubuntu.pool.n	.POOL.	16	р	-	64	0	0.0
ntp.ubuntu.com	.POOL.	16	р	-	64	0	0.0
*LOCAL(0)	.LOCL.	5	ι	16	64	77	0.0
uses = 04 Qubusting C							

開発支援のパソコンubuntuPCのntpサーバが192.168.137.3 の場合、ntpdateで確認 できる。

pi@raspberrypi:~ \$ sudo ntpdate 192.168.137.3
20 Jun 11:00:00 ntpdate[1216]: adjust time server 192.168.137.3 offset
pi@raspberrypi:~ \$



起動アプリを確認する。

\$ ps a



VNCサーバが起動していれば停止する。ここでは PID=18162を停止する。 \$ kill 18162





バージョンを重ねるうち tightvncserver(ポートNo.5901) と Raspi標準VNCサー バ(ポートNo.5900)の併用ができることが確認できた。 併用する場合はアンインストール処理は行わない。 (この部分の処理は飛ばす)

tightvncserver のアンインストール

\$ sudo apt-get remove -y tightvncserver

pi@raspberrypi:~ \$ sudo apt-get remove -y tightvncserver

/home/pi/.vnc を削除する。

\$ sudo rm -rf /home/pi/.vnc

pi@raspberrypi:~ \$ sudo rm -rf /home/pi/.vnc/

「付録3」 VNCサーバの回復

保存していたデータを元にもどす(1)

realvnc-vnc-serverを /usr/share/doc フォルダにコピーする。

realvnc-vnc-server の退避場所が

/home/pi/VncRecallData/Usr_share_doc_vnc_back として

\$ sudo cp -a /home/pi/VncRecallDate/Usr_share_doc_vnc_back/realvnc-vncserver /usr/share/doc/

pi<mark>@raspberrypi:~\$</mark> sudo cp -a /home/pi/VncRecallData/Usr_share_doc_vnc_back /realvnc-vnc-server /usr/share/doc

保存していたデータを元にもどす(2) ディフォルトの /usr/bin フォルダ内の vnc* を書き戻す。 /home/pi/VncRecallData/Usr_bin_vnc_back フォルダに退避しているとして \$ sudo cp -a /home/pi/VncRecallData/Usr_bin_vnc_back/* /usr/bin/

pi@raspberrypi:~ \$ sudo cp -a /home/pi/VncRecallData/Usr_bin_vnc_back/*
/usr/bin

「付録3」 VNCサーバの回復

保存していたデータを元にもどす(3)

/usr/share/vnc フォルダを書き戻す。

/home/pi/VncRecallData/Usr_share_vnc_back フォルダに退避しているとして \$ sudo cp -a /home/pi/VncRecallData/Usr_share_vnc_back/vnc /usr/share/

pi@raspberrypi:~\$ sudo cp -a /home/pi/VncRecallData/Usr_share_vnc_back/vnc /usr/share



ちなみに併用状態の vncserver の実行ファイルは標準VNCが使用される。解 像度の自由度が欲しい場合はリンク先を変える必要がある。

リンク先をtightvncserverのものに変えて異常なし。

併用時のvncserverのリンク先

15:10 vncpasswd -> /etc/alternatives/vncpasswd 2018 vncpipehelper 11:15 vncserver -> vncserver-virtual 2018 vncserver-virtual 2018 vncserver-virtual

当初のRasPi標準VNCサーバのリンク先

11:31 vncserver -> vncserver-virtual 2018 vncserver-virtual 2018 vncserver-virtuald 2018 vncserver-x11 2018 vncserver-x11 2018 vncserver-x11-core 2018 vncserver-x11-serviced 2018 vncserver-x11-serviced

「付録3」 VNCサーバの回復

リンク先をtightvncserverのものに変えてみる。



ポート5900での受信待ちとなる。

p i @raspb	pi@raspberrypi:~\$ netstat -Int							
稼働中の	家働中のインターネット接続(サーバのみ)							
Proto受	信-Q 送	信─Q 内部アドレス	外部アドレス	状態				
tcp	0	0 0.0.0.0:5900	0.0.0:*	LISTEN				
tcp	0	0 0.0.0:22	0.0.0:*	LISTEN				
tcp6	0	0 :::5900	:::*	LISTEN				
tcp6	0	0 :::22	:::*	LISTEN				
n i Graenh	orruni	·~ €						

特に異常は現れず。ディフォルトのサイズが選択される。

「付録3」 VNCサーバの回復

Raspberry Pi の設定							
	システム	インターフェイス	パフォーマンス	ローカライゼーション			
	カメラ:		○ 有効	● 無効			
	SSH:		● 有効	○ 無効			
	VNC:		● 有効	○ 無効			
	SPI:		○ 有効	● 無効			
	I2C:		○ 有効	● 無効			
	Serial Port:		○ 有効	● 無効			
	Serial Console:		● 有効	○ 無効			
	1-Wire:		○ 有効	● 無効			
	リモートGPIO:		○ 有効	● 無効			
				キャンセル(C)	OK(0)		



- ただし、再々度 tightvncserver をインストールする場合は /usr/bin/vncpasswd が使えないとのメッセージが出て再インストールできない。 /usr/bin/vncpasswd ファイルを削除してからインストールする。
- \$ sudo rm /usr/bin/vncpasswd
- \$ sudo apt-get install -y tightvncserver

pi@raspberrypi:~ \$ sudo rm /usr/bin/vncpasswd
pi@raspberrypi:~ \$ sudo apt-get install -y tightvncserver



SDカードをRaspberryPiに取り付け、デジタルーアナログ変換機を介してアナログモニターに接続する。



「付録4」 アナログモニタでの起動

NOOBSはネットから使用できるOSを探し出してメニューとして仕上げてくれるが、Proxy環境ではRaspbian(2.8.2では他1点)でしか選択できないので他の OSを試す場合はダウンロードサイトに戻って個別にOSをダウンロードしてイ ンストールする。

余剰のアナログモニタを使用するには以下内容のテキストファイルを作成する。ここではエディタとしてメモ帳を起動し、以下のテキスト文を入力し、 config.txtの名前で保存する。

(二) 無題 - メモ帳
ファイル(F) 編集(E) 書式(O) 表示(V) ヘルプ(H)
VGA Setting
hdmi_force_hotplug=1
hdmi_group=2
hdmi_mode=36
hdmi_drive=2
hdmi_ignore_edid=0xa5000080
disable_overscan=1

「付録4」 アナログモニタでの起動

アナログモニタ使用時はNOOBSのzip 展開フォルダにconfig.txtを入れる。

	開く(0)	名前	更新日時	種類
		\mu defaults	2018/08/10 10:51	ファイル
	すべて展開(T)	🛛 🖟 os	2018/08/10 10:51	ファイル
	7-7in	🛛 🔑 overlays	2018/08/10 10:52	ファイル
	7-2ip	bcm2708-rpi-0-w.dtb	2018/04/18 9:19	DTB ファ
	CRC SHA	bcm2708-rpi-b.dtb	2018/04/18 9:19	DTB ファ
		bcm2708-rpi-b-plus.dtb	2018/04/18 9:19	DTB ファ
	セキュリティ育威のスキャン	bcm2708-rpi-cm.dtb	2018/04/18 9:19	DTBファ
		bcm2709-rpi-2-b.dtb	2018/04/18 9:19	DTBファ
	ノロクラムから開く(H)	bcm2710-rpi-3-b.dtb	2018/04/18 9:19	DTBファ
	# <u></u> (1)	bcm2710-rpi-3-b-plus.dtb	2018/04/18 9:19	DTBファ
	共有(H) ▶	bcm2710-rpi-cm3.dtb	2018/04/18 9:19	DTBファ
	以前のバージョンの復元(V)	bootcode.bin	2018/04/18 9:19	BINファイ
		BUILD-DATA	2018/04/18 9:19	ファイル
	送る(N) ト	INSTRUCTIONS-README.txt	2018/04/18 9:18	TXT ファ・
		recovery.cmdline	2018/04/18 9:19	CMDLINE
	切り取り(T)	recovery.elf	2018/04/18 9:19	ELF ファイ
	コピー(C)	ecovery.img	2018/04/18 9:19	ディスク・
	(-/	recovery.rfs	2018/04/18 9:19	RFS ファ・
	ショートカットの作成(S)	RECOVERY_FILES_DO_NOT_EDIT	2018/04/18 9:19	ファイル
	¥110-(D)	ecovery7.img	2018/04/18 9:19	ディスク・
	削哧(D)	riscos-boot.bin	2018/04/18 9:18	BINファイ
	名前の変更(M)			
		COLOSCOLOS,		
1	プロパティ(R)			
				
NOOBS V2 8	1.2			
ZÍD				
			—	



アナログモニタの機種によっては再起動後何も映らず、ブラックアウトする場合もあり、このときはこのあとに示すようなSDカードをPCに認識させ /boot/config.txtを編集する。

以下のような画面に初期設定画面が出ればそのままでOK。映るには映るが 下記画面ような正常な形であればらRaspi上で編集も可能。





ブラックアウトしまう場合はSDカードをPCで認識させて書き換える他ない。こ こでは相性のよいubuntuマシンに認識させる。マイクロSDカードをSDカード アダプタのUSB機器を使ってPCに認識させる。

ここでは/media/user01に /SETTINGS, /boot, /root * として自動認識される。(通常は/rootとなるが、ubuntuマシンの状態によっては/root0, /root1 といった数字が付加される場合がある)



user01@ubuntu:/media/user01\$ ls
SETTINGS boot root
user01@ubuntu:/media/user01\$



各フォルダのファイルシステムは \$ df -T で確認できる。

user01@ubuntu:/media/user01\$ df -T									
Filesystem	Туре	1K-blocks	Used	Available	Use%	Mounted on			
udev	devtmpfs	463172	0	463172	0%	/dev			
tmpfs	tmpfs	98516	1744	96772	2%	/run			
/dev/sda1	ext4	51341792	7108124	41595948	15%	/			
tmpfs	tmpfs	492568	0	492568	0%	/dev/shm			
tmpfs	tmpfs	5120	4	5116	1%	/run/lock			
tmpfs	tmpfs	492568	0	492568	0%	/sys/fs/cgroup			
tmpfs	tmpfs	98512	16	98496	1%	/run/user/120			
tmpfs	tmpfs	98512	28	98484	1%	/run/user/1000			
/dev/sdb7	ext4	13457240	4217976	8532628	34%	/media/user01/root			
/dev/sdb5	ext4	30701	398	28010	2%	/media/user01/SETTINGS			
/dev/sdb6	vfat	69553	22192	47362	32%	/media/user01/boot			
	1.0	00704	00704	<u>^</u>	1000/	1 1 1 1 1 1 0 0			

「付録4」 アナログモニタでの起動

/SETTINGSには3つの.confファイル

user01@ubuntu:/media/user01/SETTINGS\$ ls
installed_os.json lost+found noobs.conf wpa_supplicant.conf

下記の/bootには Raspbianの/bootに組み込まれるファイル群

user01@ubuntu:/media/user01/boot\$ ls							
COPYING.linux	bcm2709-rpi-2-b.dtb	fixup.dat	os_config.json				
LICENCE.broadcom	bcm2710-rpi-3-b-plus.dtb	fixup_cd.dat	overlays				
LICENSE.oracle	bcm2710-rpi-3-b.dtb	fixup_db.dat	start.elf				
bcm2708-rpi-0-w.dtb	bcm2710-rpi-cm3.dtb	fixup_x.dat	start_cd.elf				
bcm2708-rpi-b-plus.dtb	bootcode.bin	issue.txt	start_db.elf				
bcm2708-rpi-b.dtb	cmdline.txt	kernel.img	start_x.elf				
bcm2708-rpi-cm.dtb	config.txt	kernel7.img					
user01@ubuntu:/media/us	er01/bootS						

アナログモニタに関するコードはconfig.txtファイルに書き加える。

下記の/rootは、Raspbianのルートフォルダに相当する。

user01@ubuntu:/media/user01/root\$ ls									
bin	debootstrap	etc	lib	media	opt	root	sbin	sys	usr
boot	dev	home	lost+found	mnt	ргос	run	srv	tmp	var
user0	user01@ubuntu:/media/user01/root\$								



ー方、ブラックアウトせず異状になりながらも画面操作ができるようなら /boot/config.txtをそのまま編集し、下記コードをディフォルト文以降に書き加える。

> # VGA Setting hdmi_force_hotplug=1 hdmi_group=2 hdmi_mode=36 hdmi_drive=2 hdmi_ignore_edid=0xa5000080 disable_overscan=1

または、df コマンドでSDカードは/dev/mmcblk0pxと認識しているので、 /dev/mmcblk0p1に最初のconfix.txtファイルがあるのでエディタなどで対象部分の コードをコピーして書き加える。

pi@raspberrypi:	~ \$ df				
ファイルシス	1K-ブロック	使用	使用可	使用%	マウント位置
/dev/root	12457240	1762760	7097944	200/	/
/dev/mmcblk0p6	69553	22498	47055	33%	/boot
tmpfs	94944	Θ	94944	0%	/run/user/1000
/dev/mmcblk0p5	30701	398	28010	2%	/media/pi/SETTINGS
pi@raspberrypi:	~ \$				
pi@raspberrypi:	∼ \$ sudo mour	nt /dev/m	mcblk0p1	/mnt	
p1@raspberrypi:	~ 💲 nano /mnt	t/config.	txt		